

# 保身、愛国と屈服：ある偽満州国の「協力者」の心理状態に対する考察

江 沛（南開大学）

原文は中国語、翻訳：劉 怡臻

要旨：1931年の九・一八事件後、中国東北三省は陥落、偽満州国が成立した。偽軍（傀儡軍）下士官の施明儒は、1937年から1945年までの間に、日記『轍印深深——一個偽満軍官的日記』（ある「満州国」軍官の日記）<sup>①</sup>を残している。この日記は、偽満州国において、偽軍将校として裏では抗日の運動をしながらも、大局を変えることができなかつたことに対して、怒り、屈辱、後悔を交えながら、不安から受容、服従へと変容していく過程を示しており、中国東北被占領地区の民衆の心理状態を代表するものである。これは東北被占領地区の民衆の心理状態において代表的な特徴を持っているというのが本論文の主張である。本論文は、歴史心理学の手法を通じて、日本軍の強権下での偽満州国「協力者」の生活・生存状況を十分に考慮したうえで、戦争の圧力による人間性の歪みを解釈するとともに、人間性の脆さと複雑さを強調し、これまで民族国家とされてきた立場から被占領地区の歴史を解釈するという単一の認識パターンを打破しようとするものである。

日中戦争は、中国人にとって間違いなく深い災厄の時代だった。日本軍は14年間にわたって東北地方を占領し、偽満州国を樹立した。外国からの侵略者と新体制を前にして、「関東へ進出」した移民を中心とする東北の人々は、民族感情と現実の生存の狭間におかれたジレンマの中で、心理的矛盾、混乱と疑念など表現しがたい複雑な心境に陥った。

日中戦争に関するいくつかの史実が未だに論争を呼んでいる今日、「協力者」、すなわち売国奴の話題は非常に敏感であり、偽満州の売国奴・偽軍人集団のテーマ研究は、現在の日中戦争史研究の弱点の一つとなっている。本論文の主要な論点は、『轍印深深——一個偽満軍官的日記』（ある「満州国」軍官の日記）は偽満州下級将校の稀有な日記である。それらを歴史心理学と生活史の観点から分類・整理することで、「協力者」や占領地の人々の日常生活や、当時の民族主義感情、生存欲求、混乱、同調意識などが複雑に絡み合つて変化する感情の揺らぎを理解し、日本の中国侵略戦争が占領地の人々に与えた心理的外傷や複雑な影響を考察する。

## 一、偽軍将校の姿—施明儒について

<sup>①</sup> 施明儒《轍印深深——一個偽満軍官的日記》（1-4巻），吉林省政協文史資料委員会、吉林市データ保管所2011年版，日記の記入は1938年1月1日より始まり、1945年12月31日までとする。（このうち、1944年のデータは散逸している）。

1931年の九・一八事件後、日本関東軍は中国東北地方の全領土を占領し、東北地方の国民党政府の行政管理組織を破壊し、1932年3月、抵抗戦争が終結する1945年8月まで、擬満州国の樹立を計画した。日本統治時代の14年間、東北地方全体を戦略的な支援地域とするため、日本軍は現地の人々を利用して社会秩序と経済生産を速やかに回復させた。これによって、人民の抵抗を効果的に抑え、アイデンティティ意識を高めるだけでなく、占領軍への軍事供給を保証し、占領の政治的・経済的コストを削減することができた。日本軍はさらに、「協力者」というもう一つの種類の人間の存在も必要としていた。

抵抗戦争の勃発時、抵抗戦争の中期、そして戦後に売国奴問題が扱われた時期によって意味が異なっていた「協力者」、「売国奴」といった用語の具体的な意味合いや拡張について論じるつもりはない。抵抗戦争勃発時、抵抗戦争中期、そして売国奴問題が扱われた戦後において、これらの用語の意味は異なっていた。戦争勃発期と戦後の売国奴問題が扱われた時期では、政治的立場だけでなく、国民感情や道徳的感情の判断も混在しており、非常に複雑である。イギリスの学者であるアンドルー・リグビーは、占領軍に奉仕する動機、目的、精神性によって、協力者を4つのカテゴリーに分類した<sup>①</sup>。私利私欲のために無条件で協力した裏切り者、占領者のために協力した愛国的裏切り者、自分や家族の生存のために協力した順応者、より広い社会に奉仕するために条件付きで協力した者という4種類である。“協力者”という言葉を定義するならば、彼らは「占領当局の監督と圧力の下で権力を行使し続ける」人々である。政治的な観点から、彼らを典型的な「反逆」の代表と指摘することは誇張だと考えられる。東北陥落の際、完全な反逆者となったのはごく少数の偽満州国の官僚だけで、他の3つのカテゴリーに属する者もいたが、大多数の人々は協力者と抵抗者の中間に位置し、自分たちの生活環境の方を重視していた。

日記の筆者である施明儒は、後者の3つのカテゴリーの代表者の一人と言えるかもしれない。彼は吉林省梨樹出身で、偽満州国の下士官でありながら、自発的に抗日運動に参加している。「1935年、施明儒は22歳のとき、故郷の吉林省麗州から敦化县に渡り、満州国通信隊に参加し、その間に3、4人の親しい友人と連絡を取り、抗日活動の予備組織を立ち上げ始め、「国民党東北亡命抗日救国社」と名付けた。施明儒は国民党の黨員ではなく、同会と国民党との間に組織的なつながりはなかった。1937年、組織の同志が2人殺されて亡くなり、救国社は名目だけで存在した。その後、経済的な安定を求めて施明儒は1938年に奉天（瀋陽）の偽満州国士官学校に入学し、愛国青年たちと出会い、1941年に士官学校を卒業した後、吉林市に戻り、偽満州軍の吉林独立通信隊副隊長を務めた。同年5月、4人の若者とともに密かに救国社を復活させ、組織基盤を整え、100人以上の組織に成長させた。1942年、禁じられた満州軍に参加し、吉林市に連絡事務所を設置した。吉林市を拠点に、出衆、九台、和田、磐石、敦化、焦河、奉天、鞍山、ハルビンなどに連絡事務所を設置した。施明儒と組織のメンバーは、偽満州軍第一、第二戦隊の艦船を破壊したり、鞍山の昭和製鉄所を爆破したりする計画を立てていたが、「情報漏洩のため失敗に終わった」<sup>②</sup>という。彼の反日行動は、ほとんどが計画段階でほとんど実行に移されることはなく、日記で日本人や偽善

<sup>①</sup> 安德魯·瑞格比『暴力之后的正义与和解』（アンドルー・リグビー『正義と和解：政治的暴力のあとに』の中文訳）刘成訳、译林出版社(2003)、P23。

<sup>②</sup> 施明儒『辙印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第一巻、P1

者への不満を吐露するのみである。日常生活では、友人や親戚を訪ねたり、本を買ったり映画を観たり、デートに出かけたりすることに熱心で、抑圧、混乱、従順といった態度が明らかに被占領地青年の特徴である。

施明儒の言動を分析することで、銃声の下での生存脅威が、被占領地の人々のメンタリティ、言動にどのように影響を与えるか、人生の真実は想像以上に複雑である。

## 二、生存の苦境：偽軍になる背景

第二次世界大戦中のデンマーク史の研究者であるヘンリク・デトレフセンは、占領状態では社会全体が既存の政治環境に適応しなければならず、権力者への融和は「どのような歴史的時代にも常に存在した習慣的な社会行動」<sup>①</sup>であると述べている。国民の大多数は銃撃の脅威のもとでは抵抗する力もなく、生産手段の特殊性から移転は困難であり、生存の危機は沈黙と協力につながった。戦況の圧力の下、中国東北部陥落の際の日本の「協力者」たちを研究することで、私たちは関係者の独特な葛藤、躊躇、混乱、服従を理解することができる。

民族主義的な感情を抱いていた施明儒は、日本軍に協力する道を選ばざるを得なかった。日本人は祖国の支配者であり、戦争は庶民を政治的な変化だけでなく経済的にも苦しめた。明確な抗日、反侵略と愛国心を持っていた施明儒は、1938年に新京（＝長春）に留学し、南嶺に戦果を見に行ったときのことを記録している。途中、九・一八事件でここに駐屯していた兵士たちが、「国賊の過ち」によって、無為に犠牲になり、ふるさとが占領されたことを思い出し、悲劇に嘆いたという。25年間にわたって採掘されてきて、埋蔵量も豊富だった撫順炭鉱が「日本の亡霊の手のひらの上で操られている」のを見て、胸が痛くなった。内モンゴル西県官地鎮に到着した彼は、商店の半分が閉鎖され、生気がない状態を目の当たりにし、なじみがある商店は残っていることについて、「景色が依然としてあるが、周りの人やものが全部変わってしまった」<sup>②</sup>と嘆いた。北部の要塞・佳木斯は「飛躍的に」発展していたが、「日本人と強盗団に圧迫され、人々の生活はうめき声を上げている」<sup>③</sup>状態だという。9.18事件以前、丙午の街は「市政発展の初期にあり、秩序があり、対岸のソ連と自由に交易し、習慣や文化を交流し、農産物が豊かで、人々は仕事に満足していた」が、今は「街は死んだような静寂に包まれ、シャッターの閉まった店や空き家がある」状態であり、町の荒廃ぶりに悲しみを覚えている<sup>④</sup>。

アンドリュー・リグビーは、「裏切り者は少なくともその犯罪の代価をある程度は支払うべきであり、苦しむ被害者は何らかの補償を受けるに値する」<sup>⑤</sup>という共通認識があると指摘する。戦争は人々を苦しめる。ナショナリズムによって非難される「協力者」ですら、ある意味では戦争の「犠牲者」なのだ。

<sup>①</sup> Henrik Dethlefsen, *Denmark and the German Occupation: Cooperation, Negotiation, or Collaboration?* Scandinavian Journal of History, 15:3(1990), pp. 198-199

<sup>②</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P70、P89、P188

<sup>③</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P347

<sup>④</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第3巻、P11

<sup>⑤</sup> アンデ魯・瑞格比『暴力之后的正义与和解』（アンドルー・リグビー『正義と和解：政治的暴力のあとに』の中文訳）刘成訳、译林出版社（2003）、中文版序文 P6

経済不況に直面し、施明儒は生きるために仕事を見つける必要があった。東北陥落から数年後、経済は回復したが、人々は依然として悲惨な生活を強いられていた。例えば、スイス時計の部品は貿易の鎖国により交換できなかった。秋林集団に次いでハルビンで2番目に大きい同済ショッピングセンターでは品物が不足していた<sup>①</sup>。結婚写真の撮影をした際に、吉林のすべての写真館が「尺二の板と閃光粉」を1年以上も品切れにしていた<sup>②</sup>。その上、価格も高騰しており、トンユウの店では2キロにも満たない冬服の小袋が70元以上もした。同游店では2ポンド以下の冬服の小袋が70元以上、正陽街の満洲書店では馮友蘭の『中国哲学史』が10元だった。交通は一時混乱し、出張中の職員は軍のトップが発行する旅行許可証を取得しなければならなかったという状態だった<sup>③</sup>。

施明儒が偽軍になることを選んだのは、便利で有利な生活を重視したからだ。日本軍にいじめられ、屈辱を味わった彼は、「父と母の糧」<sup>④</sup>を求めて「この不必要な怒り」を我慢したと告白している。『日記』には結婚式の準備の様子が描かれており、結婚式の基本予算だけでも1000元に上り、その中には「色とりどりの車、音楽、チャペルでの宴会、ドレス、写真撮影」<sup>⑤</sup>が含まれていた。物質的に困窮している中、「彼の家には恒久的な資産はなく、決して裕福ではなかった」<sup>⑥</sup>と主張する施明儒が、豪華な結婚式を準備できたのは、偽軍としての立場から得られる収入のおかげだった。加えて、人的資源も多く便宜を与えてくれた。たとえば、彼は軍隊のトップに結婚式のための「白酒特別配給請求証明書」を要求することに成功し、自動車が不足していた吉林でも友人に頼んで2台の自動車を注文することができた<sup>⑦</sup>。

施明儒は、自分の対日合作にはもう一つの理由として、それが「抗日協会」の活動に隠れ蓑を提供するためだったと明言した。施明儒は「士官候補生試験」の前に、自分は「偽満州国の功利」のために偽政府に参加したのではなく、「自分の理想を実現し、国の荒廃を繕う」ことを目的とする「別の意図」があり、偽軍への参加を抗日協会の隠れ蓑と支援に利用したのだと強調した<sup>⑧</sup>。そのため、東北抗日連合軍と擬軍の戦闘情報を入手し、動く機会を待つこと、擬軍の反満州・反日思想への対抗策を知り、慎重に行動できるようになること<sup>⑨</sup>、スパイ活動を簡単に理解すること<sup>⑩</sup>、偽軍校の新しい同志と連絡を取り、抗日社に加入してもらうこと<sup>⑪</sup>など、擬軍の活動に参加することで、密かな抗日を隠蔽・支援できるからである。

施明儒の日記から、被占領地域の「協力者」が生きる姿が徐々に浮かび上がってくる。民衆の大半は民族感情を抱いているが、占領された現状を変える力はなく、自分たちを守

<sup>①</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P73、P290

<sup>②</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第3巻、P218

<sup>③</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P159、P336、P67

<sup>④</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P56

<sup>⑤</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第3巻、P259

<sup>⑥</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P75

<sup>⑦</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第3巻、P223、P259

<sup>⑧</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P6、P61、P181

<sup>⑨</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P129

<sup>⑩</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P48

<sup>⑪</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第4巻、P247

り、最も現実的な方法で生きる屈辱に耐えるしかない。彼らの喜びや悲しみは、道徳的な物差しひとつで測れるものではないだろう。

### 三、「白皮（白い面）」の多面性—愛国者か裏切者か

ナショナリズム側の宣伝モードは、しばしば裏切り者か協力者かという両者択一の先入観がある。どんな理由があろうとも、占領軍や偽政権に仕えたり命令を受けたりする者は、常に生と死に貪欲であり、彼らを許すことは難しい。民族の大義の前では、自分の命に対する権利など取るに足らない。しかし、日本占領地の1億人以上の人々が「自国の奴隷」になるしかないことを考えると、この説明に無力さが深く感じられる。施明儒は日本の占領を憎み、抵抗行為も行ったが、彼の行動を見ると、冷静であるが同時に混乱しており、感情と実益が混在している。表面的には偽満州国政府に仕える「白皮（白い面）」の人間でありながら、「赤い心」が見え隠れているため、単純に「反逆」や「謀反」と定義することは難しい。

全体として、施明儒は公然と偽満州国に仕えていたが、内心では彼らに抵抗していた。10数年間にわたって、彼は抗日救国社の秘密仕事を務めながら、偽満州国の仕事を並行して行っている。偽満州国の職は彼らの抵抗にとって最高の隠れ蓑である。入隊途中、偽満州人将校として同胞の保護に全力を尽くし、女性教官が兵士に侮辱された際には、真相を突き止めて上官に報告し、厳重な処罰を受けさせた。関東軍が「八路軍の家族を除外する」という口実で、30人以上の脱走女性を連行して臨時慰安所を組織したとき、彼は「密かに情報班長に命じて、車でここに連行してきた女性たちを全員解放させた」<sup>①</sup>。彼のアイデンティティと行動における光と闇の組み合わせは、通常の意味での敵国人労働者のそれではないし、これまでの日本人「協力者」の記述とまったく同じに扱うことはできない。

質が比較的に高くない偽軍の集団はしばしば、生き残るための無力感、ふるさとの誇示、権力の応酬、さらには暴力による地位の誇示といった矛盾した感情を見せた。捕虜になった民兵を拷問する偽軍を見た時、施明儒は「胸が痛む」と感じ、「同じ中国人なのに、この国難の時に、なぜこんなに冷酷で狂気じみたことをしなければならぬのか」と率直に言った。「最近、兵士たちは捕虜になった民兵を殴っている。最近、兵士たちは街頭で山賊のように振る舞い、拉致して金を脅し取り、陵辱し、悪の限りを尽くしている」と聞いて、「まるで獣や禽獣のようで、言語道断である」と罵り、「駐屯地が襲撃されたとき、上官たちは恐れて無計画に支援に行かず、それどころか、士官二人と共に、娼婦を呼び部屋で酒を飲み、みだりに情欲に耽け、兵士たちもそれにマネした」とき、彼は深く悲しみ、「東北人は生まれながらにして人間の心を持っていないというのは本当なのか？」と問い返したという<sup>②</sup>。

「協力者」の多面性が必ずしも政治的抵抗につながるとは限らず、1940年代初頭に東北抵抗運動が鎮圧された後、武装抵抗者は日本軍と直接戦闘できる立場にあることはほとんどなく、地下抵抗に頼らざるを得なかった。施明儒は偽軍の身分であったため、状況を常に把

<sup>①</sup> 施明儒『辙印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第4巻、P187、P188、P189

<sup>②</sup> 施明儒『辙印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第4巻、P17、P220、P228

握することができ、秘密工作を円滑に進めるための技術的、財政的、人的支援を提供していた。それでも、施明儒が率いる小さな組織は、10年の間に大小の作戦を何度か行ったが、そのほとんどは夜間にビラを撒いたりスローガンを掲げたりするもので、効果には限度があり、3人のメンバーが犠牲になったことさえあった。

日本統治下という揺るぎない事実を目の前にして、施明儒に代表されるように、愛国心はあるが家を破壊させたくなく、落ち込んで混乱しているが、混沌とした世の中で利益を上げたいジレンマに陥っている人々がいた。そのような心理の背景には、自己保存と利益追求という人間の本性があった。これまでのイデオロギーによる判断や知識構造では、支援も組織もない被占領地区の民衆が反乱に立ち上がる条件を備えていないこと、被占領地域の民衆が客観的に日本の統治を支持しているとは考えることができないこと、「白皮（白い面）」のすべてが心の中で進んで国家の利益を売り渡したわけではないこと、といった前提を見落とすのが常であった。同胞いじめや武力による収奪は、原始的な劣等感と利益追求の行動の結果に過ぎないのかもしれない。

#### 四、人間性の変化—屈辱と都合主義？

被占領の際、国家の大義と人民の苦しみを前にして、裕福な生活を送り、保身に努めた施明儒は、決して常に心理的抑圧を受けていたわけではなく、情勢や利害に左右されて、その気持ちも時々刻々と変化していった。

1938年3月、施明儒は軍官としての合格通知を受け取ったが、「偽満州国の名声狩り」をして「大失敗を犯した」と自責の念を禁じえなかった。彼は、ただの「職場の付き合い」であるが、途中で立場が変わったと同胞に誤解されることを心配していた。同時に彼は、この仕事が本当に秘密の反日行動にとって有益なのかどうか疑っていた。「馬を失ったときに、不幸と幸福の区別をつけるのは難しい」・「それなのに、なぜわざわざそんなことをするのだろう」と考えていた。1940年8月、施明儒が行軍中、途中のところどころで「木の皮が大きくはがされ、宣伝のスローガンや訓示が書かれている」のを発見した彼は、「これは生き残っている満州人に見せるためにおくものだ」と考え、同時に彼は、東北抗日連合軍の友人たちに、「偽軍に対する同情と理解は不可欠だが、決して簡単に信用してはならない。彼らは決して信用できないからだ」<sup>①</sup>

偽満州軍人として、施明儒は国家と民族の行く末を案じていた。偽満州国建国6周年を迎えた初春の月、寒々とした吉林大埔彩河に突然雨が降り、施明儒は天が中国に「同情の涙を流している」<sup>②</sup>と感じた。九・一八事件10周年の日、施明儒は「血塗られた中国」の沈黙を嘆き、「臥薪嘗胆」しか「悲しみと憎しみの虚しさを埋めることはできない」と考えた。

臥薪嘗胆してこそ、「悲しみと憎しみの空虚を埋める」ことができると考えたのだ。双十節（国慶日）の夜、彼は「革命の精神は決して死なない」とささやいた。時代劇の映画「紅石山」は施明儒の繊細な神経に触れ、登場人物の一人一人が現代の偉人を反映しているのではないかと思った。この映画は「愛国運動の真っ盛りにある『秘密結社』を描いたもの」であり、映画の中のセリフには「革命殉教者の精神」が滲み出ており、「盗人を父と認め、富と栄光を享受するもの」を見て、「汪の謀反と偽満州政府の当局」を思い起こさせ、「小人が

<sup>①</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P28、P184

<sup>②</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P20

位にあり、君子が野にあり」という現実に警鐘を鳴らした<sup>①</sup>が、自分自身が偽政府の仕事に参加しているということには一切触れていない。

時が経つにつれ、彼の心情はより複雑に変化していった。1942年9月、些細なことで侮辱された彼は、「征服された人民は常に征服者に抑圧される」と嘆き、自分は「征服者の権利を本当に認めているわけではない」と主張したが、10年間にわたる苦闘の経験と置かれた状況を通して「自分の人格を扱う上で、状況に応じて取るべき態度」を理解することができたと主張した。著者は、「青年の事業」のために「人間としての義務を妥協」し、「理不尽な侮辱や不当な扱いを最大限忍耐強く受け入れる」ことができた。彼が沈黙を選んだのは、人生という戦場で得た「唯一の戦場」のためだけだった。しかし、「私の血管を流れる血は、今も頑固の血である」。<sup>②</sup>

このようなことは何回も経験されている。1943年8月、施明儒は日本人が経営する木材工場に赴き、「安く買って高く売る」ことを恐れて満州人には木材を売らないと言われた。彼は日記の中で、「軍人がそんな卑劣なことができるのか？」と怒ることしかできなかった。1945年8月、彼は足が腫んで動くことが困難になり、戦闘の命令を遂行することができなくなった。日本軍に休暇を認めてもらえなかった彼は、本当に「無価値な血と汗を流し、裏切り者の悪名を背負っている」と怒り、痛みに耐えて戦争に参加した。1945年末、日本の敗戦後、施明儒は戦勝を振り返り、冷ややかで寂しい気持ちになり、平凡な一年がまた無駄になったと感じ、戦争に参加するために後方に逃げなかったことを悔やんだが、「戦争での功績もなく、将校の友人や親戚もいない」ため、「顔を見せる」ことができず、「裏切り者」のままであったことを悔やんだ。“偽善者”のまま、“奴隷”の帽子をかぶっている<sup>③</sup>。

施明儒は偽軍での仕事について、不安から徐々に自分に受け入れられるまで、不満、憤り、屈辱が従順さと無力感の中に混在している。強い矛盾感に彩られてもいた。入隊した1938年から1941年末まで、彼は中国の抗日戦争を確信していた。しかし、太平洋戦争への誤った認識のため、1942年以降、施明儒は悲観主義に陥り、民族の正義を忘れて酔いしれ、日本人と偽満州国に追従し、生き残りや保身を図るようになる。ここには、心の中に抵抗心を持ち、屈辱を厭わなかったように見えた戦士が、慰安を追い求め、正義感を失った臆病者へと変貌していく姿がある。国家の正義と生存欲の本質が絡み合うことは、決して矛盾することではなく、一人の男がさまざまな顔を持っているのは、銃の下にある命の本質に近いのかもしれない。

施明儒の複雑な心理には、被占領地の典型的なものがある。権力を前にして、ある者は反旗を翻し、ある者は国を裏切って栄光を求め、また多くの者は施しのように従順を強いられ、抑圧され、次第に麻痺していった。抗日学校を卒業した若者たちは、ゲリラ戦線で敵を殺戮する勇気を持っていた。偽満州国が英米に宣戦布告したとき、かつての同級生たちは日本のために戦ってくれと手紙を書いたが、それは恥ずべきことだった！<sup>④</sup>ハルビンの市民は街に残された死体の山に対して麻痺している。<sup>⑤</sup>「商女は知らず亡国の恨み」（注：杜牧

<sup>①</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P70、P129、P51

<sup>②</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第3巻、P71

<sup>③</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第4巻、P57、P225、P298。

<sup>④</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P111-112、P124

<sup>⑤</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P334

「秦淮に泊す」より。歌姫たちがかつての王朝の亡国の悲哀歌であるとは知らぬであろうに酒樓で歌われていた」といった古典詩句を思い起こさせた。<sup>①</sup>施明儒の描く占領地での生活では、被占領地での最初の悩みから1940年代半ばにかけて、人々の意識は徐々に乖離していった。『大義』と『責任』のために積極的に日本軍に抵抗する人々がいた一方で、「母親が家にいて、危険を冒したくない」という理由から、「命および家族を大切にする」人々もいた<sup>②</sup>。権力に支配された植民地時代の光景に話を戻すと、国民が示す愛国心のレベルには差があるものの、それはやはり社会的な表現であり、戦争という混沌のもとでの人間の複雑な本性を反映している。

果てしなく続く日中戦争の社会的圧力は、「侵略が空間的にどこまで広がるのか、時間的にいつまで続くのか、中国と日本の利害がどれほど複雑に絡み合うのか、誰も知らなかった」<sup>③</sup>。「民衆が多く従順になった背後には、自己保身と利己主義が根本の理由である」<sup>④</sup>。彼らの多くは、占領されたことは一時的なものであり、国家主権はいずれ返還されるため、生き残るしかないと考えている。中国人に内在する公私私欲の概念は、日常生活では自分の家の玄関前の雪を掃くように現れ、国家レベルでは英雄を待つように表現されることが多い。権力と対峙する人間の複雑な本性を前に、ナショナリズムはしばしば、語られるだけのレベルになり、実現されないままの苦境とみなされる。

## 結論

戦時中、中国の陥落地域は東部各省に広がり、人口は1億人を超えた。日本の占領期間は50年（台湾）、14年（東北部）と長く続き、7、8年、あるいは数年と短かったところもある。日本統治が人々にもたらしたものは何だったのか。日本政権が労働者を拉致し、慰安婦を強制連行し、戦地を焼き払い略奪し、国民の経済生活を抑圧したことは反論の余地のない事実である。問題は、それが被占領地のある一場面でしかなく、裏の日常生活が本体であることだ。今までの研究では、占領期の歴史について、「日本の侵略者は被占領地でできる限りのことをし、金をゆすり、罪のない人々を殺し、あらゆる種類の悪事を働いた」という、かなり一般的な印象しか与えていない。しかし、感情的なニュアンスの強いこれらの言葉は、日帝支配の実態や、占領地の草の根の人々が暮らす社会の状況を理解する上で、何の役にも立たない<sup>⑤</sup>。占領地の下層階級の人々がナショナリズムの「原罪」の烙印を押されたのは明らかに不当である。政治的高圧的な態度のもとでの大多数の人民の存在状態と精神状態の変遷を理解してこそ、人間を殺傷した野蛮な侵略と政治的高圧的な態度によって引き起こされた苦しみの大きさについて、より深い理解を得ることができるのである。

侵略に直面し、被占領地の一部の人々は立ち去るか抵抗する道を選んだが、大多数は逃げることもできず、急遽変えられた日常生活の継続として沈黙を守った。暴力の最初の時期が過ぎると、住民たちは、散発的な侵入が日常的な支配になると錯覚し、気づかぬうちに時が

<sup>①</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第4巻、P205

<sup>②</sup> 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P47、P11

<sup>③</sup> 卜正民『秩序的沦陷：抗战初期的江南五城』潘敏訳、商务印书馆2016年版、P38

<sup>④</sup> 刘熙明『伪军——强权角逐下的卒子』台北稻香出版社2002年版、P108

<sup>⑤</sup> 潘敏『江苏日伪基层政权研究1937—1945』上海人民出版社2006年版、P1-2



過ぎ、住民たちは次第に新体制の支配に順応し、屈服していく。生きたいという欲望が、受け継がれてきたイデオロギーや道徳規範の束縛を乗り越えたとき、民族や国家に対する人々の立場は徐々に変化し、「協力者」が生まれた。多くの場合、日本偽政権体制への直接的な奉仕と生存のための労働は別物であり、前者は公的な発言や行動という「政治的正当性」によって、利権の喪失を回避したり、利権と生存を交換したりすることを期待して日本偽政権体制のプロパガンダを鸚鵡返しすることであり、後者は行政サービス、経済サービス、運輸・郵便サービス、新聞・定期刊行物の発行、出店など、生存のための規範であった。これらは社会運営に不可欠な分野であり、それなくしては国民が生計を立てることができない。ある状況における人々の選択を、道徳的基準に基づいて推定することができないのは、人間性の立場に基づくだけでなく、歴史的状況の理解に対する反省を欠くことは無意味であり、有害でさえあるからである。

近年、中国では徐々にナショナリズムが広まりつつある。外国からの侵略に対抗して人民の士気を高めるためには、国民国家の立場に基づいた主流の物語を展開する必要がある、人民の生存権も感情的に軽視される。問題は、このような立場判断が日常生活の論理的な力にはかなわないことが多いことだ。毛沢東はかつて「遼海燕冀，漢奸何多！以地事敵，敵欲豈足？人執笞繩，我為奴辱」<sup>①</sup>（東北三区には売国奴が極めて多い。土地を割譲して敵と和解するが敵は満足できない。人は鞭を手にとり、私は支配される奴隷にならざるをえない）と嘆いたことがある。私たちがずっと民族精神と死への抵抗を称賛し、「協力」を国の隷属とみなしてきた一方で、国難のたびに裏切り者が湧き上がるという奇妙な現象をどう考えたらいいのだろうか。

日中戦争の歴史は、侵略と抵抗の歴史であると同時に、ある意味で「協力」の歴史でもある。いままでの研究では、「権力下での生存」はしばしば裏切り者や「協力者」と結びつけられ、そこに含まれる立場的・道徳的判断がしばしば私たちの思考を導き、制限してきた。東北陥落地区における日本人「協力者」の心理を、権力下での生存という観点から考察するとき、私たちは、これまで私たちが知らなかったより暗い物語と、より複雑で困難な選択を見ることができ、それは、私たちが日中戦争史の俯瞰を試みるための前提条件となる。

## ■江沛 (JIANG, Pei)

南開大学歴史学院教授。南開大学中外文明交叉科学研究センター執行主任。中国史学会理事、中国現代史学会副会長、天津歴史学学会副理事長を兼任。2014年から2020年までは南開大学歴史学院院長を務めた。『中国近代交通社会史叢書』などの編集を主宰。日本大阪大学、広島大学、中国台湾政治大学の客員教授を歴任。専攻は民国史、中国近代社会史。現在は首席専門家として国家社会科学基金・抗戦研究プロジェクトを主宰。

主な著作：『戦国作派思潮研究』、天津人民出版社、2001年。『国民党結構史論』（下巻）、中華書局、2011年。『城市化進程研究』（中華民国專題史叢書之九）、南京大学出版社、2015年。

<sup>①</sup> 毛沢東《祭黄帝文》（1937年4月5日）、《新中華報》（1937年4月6日 1版）。